

海外出張の思い出（ナイジェリア編③）

高島敬明

今回の工事のパートナーであり、キャンプの責任者でもある H マネの話からお話ししましょう。H さんは、定年前で 50 代半ばです。海外での長期の仕事一筋にやってこられた方で、会社でも一目置かれた方とお聞きしました。いつも冷静で白髪混じりのハンサムな方で外国の方、協力会社との折衝では、得意な英語でスマートに対応していました。ハウスキーパーに舌打ちをしながら英語でべらべらとしかりつけるのを聞くのは私にとって新鮮な体験でした。統括している上司の S マネージャーから H マネを紹介されたときは、いい方なので大いに安心しました。

キャンプの中は綺麗に整頓され、指揮命令系統もはっきりしておりマネージャーの指導力を感じました。当然キャンプは安全のために周囲を高い鉄条網で二重三重に囲まれています。キャンプに隣接してナイジェリアの「グリーンビール」の工場があり、その周りは密集した集落で人がいっぱいでした。ドブ状の川が流れ、変な匂いが鼻に付きます。ビール工場は砂地に建った立派な建物ですが、この川の近くの井戸から汲み上げた水でビールを製造しているのです。深く考えると飲めなくなりますが、夜の食事には必ずこの緑の瓶に入った冷えたビールを飲みました。日本と違って度数が強く 7 度くらいでした。キャンプの水も同じことですが、なぜか甘くて非常に美味しい水でした。

やっとの思いでキャンプに着いてまもなく私の部屋に案内されました。コンテナハウス 1 棟の比較的広い部屋です。諸設備は一通り揃っていました。次のような注意事項が書いてありました。＜クーラーは 24 時間止めないこと。靴、スリッパは外に脱いでおかず必ず中に入れること＞です。クーラーで外気より室温を下げておくと外から生き物がコンテナの中に入らないとのこと。生き物と言っても、蛇、サソリ、40 cm くらいのトカゲなど物騒なものばかりです。後々の話ですが、作業員の悲鳴で飛んでいく

と外に一晩置いた靴にサソリが入っていて刺されたそうです。足はグローブのように腫れてひどく痛い思いをしたそうです。部屋の外にはマンゴーや椰子の樹などがありましたが、そこら中に先程の 40 cm くらいの大トカゲが首を上下に振り長い気持ちの悪い舌をへらへらと出しながら動き回っています。無害とはいえ、初めてみるものには気持ちのいいものではありません。追っ払っても追っ払っても集まってきます。向こうにしてみれば「見慣れないものが来た」と、もの珍しく見物しているのでしょう。やはりアフリカ大陸は異質な大陸でした。

夕方になって、魚国の T 料理長は新人の高島さんが来たので、いつものように日本の食材を使った料理で歓迎してくれるというのです。総勢 20 人くらいに少なくなった人達でビール、ワイン、ウイスキーで歓迎していただきました。日本の食材を使った料理は、エビがいっぱい入った焼きそばでした。料理長苦心の逸品だそうです。食材の輸入は原則禁止の国ですから、外国の食材は無いわけですが「蛇の道は蛇」で料理長が集めて来たそうです。皆さん歓声をあげて酒のつまみにしながら少しづつ食べていました。コメはカリフォルニア米、その他の食材は現地のものは一切使わず、すべて英国のキングスウェイというデパートから仕入れているのだそうです。



私の運転手ビアフラの戦いのエマニエル大尉(キャプテン)。
気のいい 2 児の父親で黄熱病を持っていて何時も微熱がある。

ナイジェリアはイギリス連邦加盟国なので食材の輸入は原則禁止でもイギリスは OK なのでしょう。キングスウェイは日本の三越のような英国のデパートだそうです、ラゴスの町に何か所あるそうです。ここでもいい肉や魚が手に入らないので、大方の料理はこのエビで味付けされます。エビは日本の大洋漁業が大西洋で採って瞬間的に冷凍したものです。

飲むほどに酔うほどに皆さん大きな声で話していましたが、ただ一人物静かに食事をしている人がいました。紹介されて以来じつくりと話す機会の無かったキャンプマネージャーの H さんでした。私が今日の歓迎会のお礼に伺った時、「高島君座りなさいよ」と空いていた隣の席を指さしました。一人でどんどん話出します。《海外生活が長く酒で体を壊し今は酒は殆ど飲まない。肝臓は肝硬変で自分の拳ほどしかない。定年まで勤められるかどうか。》と、一気に青い顔に神経質そうなしわを浮かべながら話して行きます。そして「明日、金曜日にはラゴス市の中心バービーチにある支店に行って、全体の工事の物流・資材調達・ナイジェリア国との折衝などを任された上司の S さんに会いにつれていくから」と告げられました。

翌朝 H マネの車をマイケル軍曹が運転して事務所に向けて出発しました。車中で H マネは、「ナイジェリアは軍事革命でオバサンジョが大統領になりました。革命政権なので武器を持っていたり不審者は即刻その場で射殺してもいいことになっています。交通事故を起こした時は速やかに現場を離れなさい。犯人を捜しただけの警察力はないし、集まって来た群衆にリンチに遭い殴り殺されます。とにかく黒人は信用してはならない」と強く言いました。そのうち高速道路が渋滞で走れなくなりました。すると車の周りを子供たちが取り囲んで来ました。洗車ブラシを持ったものは車のガラスを磨かせてくれと言っているのだそうです。手を出している子供たちは物乞いです。よく見ると手先の一部が溶けたように無くなっていました。H マネは大きな声をあげて英語で口汚く罵ります。そして小銭を遠くに投げてやりま

せてやりました。H マネは「高島君お金を投げるんだよ！」と大声で言いました。子供たちはライ病のために指の一部が無くなっていたのです。ようやくこの場を通り抜け C 化工建設のラゴス支店に着きました。海岸沿いの眺めのいい 3 階が S マネージャーの部屋でした。

部屋にはガーガー言っている短波の無線設備がありました。短波で無線通信をしているのです。S マネは、「今日はだめだよ。サイト（1000 km 遠方の町）と連絡を取っているのだが繋がったり切れたりして話ができない。途中でスクールとか、雷とかで天候の悪いところがあるのだろう」と言っていました。当時は紙テープでの通信が主流の時代で、多くの内容を送付するのには不十分でした。S マネは「高島君、今回のプロジェクトは貴方の会社が主流だから前の所長のように頑張ってください。期待していますよ」とそれだけ言われて終わりました。すると H マネに向かって「H 君、今日は金曜日だから午後は罪人の処刑があるよ！」と、半分は私に見せたいように声をかけました。事務所の窓から真正面の 500 メートルくらい先に見えるそうです。何のことなのか訊きますと、バービーチはラゴスで一番の海水浴場ですが毎週金曜日のイスラム礼拝日に海岸の端で銃殺刑があるとのことでした。2 時過ぎでしょうか、誰かが「いまから始まるぞ！」と言いました。太鼓の曲に合わせて 15 人くらいの人が踊りながら出て来たようです。笑っている感じなので誰だろうと思っていたら死刑囚本人とのことでした。信じがたいことですが、回教では銃弾で死んだ場合は必ず生き返るので、だから踊りながら笑いながら出てきて喜んで死んでいくのだそうです。後は文章にできないのでご想像にお任せします。こうした思想は恐ろしくてとても理解できませんでした。ナイジェリアの病巣を見た思いでした。このような場面に遭遇してしまい何かイヤなことが起こりそうな予感がしながら、すっきりしない気分その日はキャンプに戻りました。それから今後の主な仕事場であるラゴス港岸壁を見て回ったり、協力会社の運輸会社に挨拶に伺ったり一週間がアッという間に過ぎ去りました。（続く）